

技術者の自負を持って 臆せず楽しくチャレンジ！



おおいし こうぞう
大石 耕造*

1. はじめに

最近、大学の先生から「近頃の公務員技術者は技術の話をしなくなった」「自治体の技術者が何をしているのか見えない」との指摘を受けた。土木系の学生が公務員技術者を志望しない一因はそこにあるとのことだった。

会員の皆さんは大半が土木系公務員技術者だと思うが、技術者としての自負を持って仕事をしているだろうか。私は、若い頃、尊敬する上司から「公務員技術者たるもの、技術職として採用されたからには公務員である前に一介の技術者たれ」との薫陶を受け、常にその言葉を胸に仕事に取り組んできた。

皆さんが技術者として生き活きと働く姿を見せるところ、公務員技術者の存在意義や魅力の向上につながるものだと思う。社会環境や価値観が大きく変化し、参考になるかどうかかわからないが、私が元気に楽しく仕事をしていた頃のエピソードを紹介することにより、公務員技術者の仕事の楽しさや醍醐味に気づいていただければ幸いである。

2. どんな仕事にも果敢にチャレンジしよう！

土木に限らずどんな仕事でも、気持ちが入らず嫌々やっていると、成果は上がらない。初めて担当する仕事や難しい課題解決を命ぜられたときは不安な気持ちになると思うが、それ以上に未知の仕事に対する興味や大事な仕事を任せてもらったことうれしさなどを感じて、思い切って取り組んでほしい。特に、若い人にはちょっと背伸びするくらいの仕事を積極的につかみにいってほしい。

以下に示すのは、私が入庁してから30代前半までに果敢に楽しく取り組んだ仕事である。成功体験を中心に書いているため、自慢話のように聞こえて申し訳ないが、ご容赦願いたい。

1) 舞鶴港港湾計画の改訂（入庁3～4年目）

京都府に入って最初の配属は港湾課。入庁3年目に舞鶴港港湾計画の改訂を担当することになった。港湾計画は取扱貨物量や施設計画を定める法定計画で、概ね10年ごとに改訂する大仕事であったが、先輩方はすでに多くの事業を抱えていたこともあり、若輩の私にお鉢が回ってきた。

当時の私は、怖いもの知らずで、何でも首を突っ込みたくなる性分であったため、担当の打診があったときは「はい、やります」と即答した。計画改訂のため新たに運輸省から出向してこられた係長の指導を受けながら、貨物量推計や計画資料の作成を行ったが、当時はパソコンもメールもなく、手書きで資料を作っては、何度も運輸省第三港湾建設局(当時)へ協議に通った。協議は夜遅くまで続くこともあったが、運輸省から来られた係長は出来の悪い私に我慢強く付き合ってくれた。協議を終えて神戸から京都へ帰る東海道線の終電(ボックス席ではない!)の中で、牛丼と一緒に食べたことは忘れられない思い出である。また、ヒアリングのために「韓国大使館へ行くよ」と声をかけられたときは仕事のスケールの大きさに驚いた。この仕事をやり遂げたことで、公務員技術者としてやっていく自信がつかるとともに、東アジアの政治情勢等に翻弄されながらも、京都府発展のために頑張る京都舞鶴港が大好き

*一般財団法人 京都技術サポートセンター 理事長

になった。

京都舞鶴港は、その後の状況変化に応じて、計画見直しを行いながら整備が進められており、今ではコンテナ船やクルーズで賑わう立派な港(写真-1)となっている。



写真-1 京都舞鶴港(舞鶴国際ふ頭)

2) トンネル工事の監督(入庁6~7年目)

2つめの配属は旧京北町にあった周山土木事務所で、昭和63年京都国体を控え、多くの道路事業を抱えていた。しかし、道路事業を担当する当時の技術第1課は、課長を除いて全員入庁6年目までの若手で、体力とやる気は十分だが、経験は不足しており、さながらクラブ活動のような雰囲気職場であった。

私は現場に出て2年目で、普通の工事現場の管理も満足にできないにもかかわらず、トンネル工事を担当することになった。トンネルや地盤に関する知識もほとんどなかったが、トンネル標準示方書や技術基準を片手に、現場立会や岩判定に奮闘した。また、旧道のトンネルまでの離隔が最短で18mしかなく、坑口から極めて近い位置に住宅もあったため、試験発破を行い、変状計測や騒音・振動対策を重ねながら工事を進める、本当に厳しい現場であった。大きなトラブルなく完成したときは、うれしさよりホッとしたというのが実感である。今思い返すと、あの対応でよかったのかな??と思うこともたくさんあるが、この事務所でトンネルや橋梁など地図に残る仕事を経験させてもらい、現場でもものをつくる楽しさや工事が完成したときの達成感などを味わうことができた。

写真-2は完成したばかりの橋梁現場で記念撮影

した写真を年賀状にしたものである。自分が担当した橋梁が我が子のように思えて、ヘルメット、ドカジャン姿の年賀状を送ったが、送られてきた方は新年早々さぞ迷惑だったと思う。



写真-2 平成2年年賀状(吉野橋にて)

3) 京都縦貫道の整備(入庁9~13年目)

3つめの配属は京都府道路公社。京都市と宮津市を結ぶ高規格幹線道路「京都縦貫自動車道」の最北部にある綾部宮津道路(約25km)を整備するために平成2年に設立されたばかりのところに異動になった。

綾部宮津道路は京都府が建設する初めての高速道路で、事業着手から概ね10年間で完成することが大命題となっていたが、京都府には高速道路を建設する設計基準すらなく、当時の道路公団福知山工事事務所に足繁く通い、設計要領や工程管理の極意などを教えてもらいながら、事業を進めることとなった。

約10年で25kmの高速道路を完成するという無理難題を克服するため、地元の協力を得て用地取得をバリバリ進めながら、公団に教えてもらった座標式工程表を使って全体工期内に収めるための工事計画を検討した。有料道路でもあったことから、工事費が少々増えても、全体工期を短縮することを優先し、工事用道路の追加や施工方法の変更などを行った。新しい知識や経験を吸収することにより、自分がレベルアップしていることを実感するとともに、多くの人と協力してプロジェクトを成し遂げる面白さを経験することができた。なお、綾部宮津道路は、関係者の努力により事業着手から13年後の平成15年



写真-3 綾部宮津道路（舞鶴由良川大橋）

に全線供用している（写真-3）。

上記の入庁後3所属、13年間で得た知識や経験で、残る25年間の公務員生活における技術的課題に対応してきたと言っても過言ではない。技術的な仕事に没頭した13年間であり、今思い出してもよく頑張ったと思うが、それ以上に、こういった仕事を若手に任せ、しっかりフォローしていただいた上司・先輩に感謝、敬意を表する次第である。

近年、多くの自治体で急速に世代交代が進み、技術の継承や経験不足が問題になっているが、若い人たちの力を信じ、上司やベテランが積極的にフォローすることにより、ピンチをチャンスに代えていくしかない。最近では、失敗や結果に対する責任をすぐに追求しようとする傾向があり、難しい面もあると思うが、土木に携わる公務員技術者の底力を見せるためにも、力をあわせて頑張っていたきたい。

なお、上記エピソードは、当時の「京建会報・技術報告会特集号」（京都府建設技術協会発行）を基に書いている。業務多忙の中で報告書作成や発表の準備をするのは大変だが、仕事の過程や成果を総括的にふり返るとともに、自分をPRする絶好の機会である。ぜひ積極的に取り組んでほしい。

3. 人との出会いを大切に

公務員技術者にとってもうひとつ大事なことは、人との出会いやコミュニケーションを大切にすることである。一緒に仕事をする同僚、上司との意見交換や懇親が欠かせないのは言うまでもないが、仕事

で関わる国や他の自治体の方々との出会いは本当に貴重であり、大きな力になる。インフラの整備・管理やまちづくりの参考とするため、他の自治体の先進事例を調査し、優れた部分を自分たちの特徴に合わせて真似ることは決して悪いことではなく、極めて効果的な方法である。私自身、港湾計画や高速道路の整備、入札契約や技術者の確保・育成などの業務で、他の府県や政令市の方から多くのヒントをいただき、成果を上げることができた。仕事を通じて深く知り合った皆さんとは今でも交流があり、まさに人との出会いは財産であることを実感している。

その際、こちらが持っている情報やノウハウも積極的に提供することが大事である。観光振興や企業誘致の分野では自治体間競争などと言われるが、道路はネットワークを形成し、河川は流域全体で対策を図るなど、行政や府県の枠を超えて対応してこそ大きな効果が発揮される。DXや人口減少・高齢化が進むまちの再生など前例のない仕事が増えてくる中で、自治体の技術者が組織を超えて連携し、情報共有や新たな取り組みを行うことが必要である。

4. おわりに

公務員技術者の仕事は、住民からの苦情対応や業者との折衝などそれぞれの場面で切り取ると楽しくない仕事もある。しかし、それはあくまでも仕事を構成する一場面であって、人々の生活や産業を支えるインフラの整備・管理、安全で快適に暮らせるまちづくりなどは、本当に重要で魅力あふれる仕事である。住民が自治体に求めるサービスの質や量は変化しても、インフラの整備・管理やまちづくりを支える公務員技術者の役割は変わらない。

ぜひ、皆さんにはその仕事の必要性や重要性を改めて認識していただいた上で、前向きに楽しく仕事に取り組んでいただきたい。住民に身近なところで働く公務員技術者が輝いてこそ、土木全体のイメージアップや公務員技術者の評価アップにつながるものである。一人ひとりが主役のつもりで頑張っていたきたい。

【著者紹介】 大石 耕造（おおいし こうぞう）

昭和57年京都府庁入庁（土木職）。港湾関係5年、道路関係19年（うち道路公社10年）、入札契約関係5年のほか、技術者の確保・育成などの職務に従事。乙訓土木事務所長、港湾課長、指導検査課長、技監等を経て令和2年3月に退職し、4月より現職。